

### 1. 活動のテーマ、問いを考える

**【テーマ】**  
 感触あそびを通じて、言葉や身体の動きの発達を促そう  
**【問いを考える】**  
 (触れて)これってどんな感じかな?

### 2. 活動スケジュール

2025年7月～2026年12月

### 3. 環境設定と探究活動の内容

**【環境設定】**  
 水、氷、紙粘土、小麦粉粘土  
**【探究活動の内容】**  
 いろいろな素材や自然物からその感触を味わい、驚きや感動を身振り手振り、視線や表情、言葉で表現し、自分たちもやってみたいという気持ちを育む。

### 4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

夏に、水遊びか慣れて来たので、水を凍らせた氷あそびをしてみたところ、冷たさに驚いたり、手の中で溶けていく様子をじっと観察したり、溶けてできた水が、普段の水より冷たいことに気づいて声に出したり驚いた表情をしていた。保育者が「つめたい?」とその都度声をかけたり、「こ・お・りだよ。お水と違うね」「かたいよね」「つめたいね」と繰り返す言葉にして、子どもの気持ちを代弁しながら伝えていた。紙粘土は、触る際に嫌がるそぶりや、触るまでに時間がかかり、職員間の会議でビニール袋やジップロックに入れて手だけでなく足等で触ってみるもよいのでは?という意見から、取り入れて子どもたちとあそんでみることになる。少しずつ慣れて触れる体験ができた。色の認識をしたり、袋越したと果敢に触り、じっくり考えて握る様子や何度も触った感触を確かめる様子もみられた。足で踏む間隔は驚きを表情でも伝えており、友だちにも「○○ちゃんも!(やってみて)」と誘う姿がみられた。小麦粉粘土遊びでは、少しずつ指先の発達とともに、粘土を押ししたり、引き延ばしたり、くっつける仕草ができるようになり、楽しめるようになる。おいをかいたり、感触を言葉にして「モミモミ」等声に出す様子が見られる。集中しており、繰り返しちぎったり、ちぎったものをくっつけたりして20分間くらいあそんでいた。



### 5. 振り返り

今回の活動では、身近な自然物や素材から、子どもたちの興味を引き出し、もっと深く観察したり、想いを言葉や表情や仕草で自分で表現できるように感触あそびを行った。感触を言葉にする際に何度も擦り返し、確かめる姿が見られたり、言葉と一緒に触りながら何度もつぶやいてみたり、手だけでなく足でも触れてみて感触を楽しむ姿が見られていた。小麦粉粘土はにおいが、パンなどでなじみのあるにおいだったので、好んで、おいをかいたり、友だちとも共有して楽しむ様子が見られた。遊びこむうちに、自分がつけた跡を確認したり、じっと考えながら(次はこうしてみよう)(こうやったら、どうなるのかな?)と試してみる遊び方も見られていた。指先に力がこもり、ひきちぎる。くっつけるという仕草も繰り返すたびに、細かくちぎることができるようになっていって、子どもたちも、できた喜びを保育者に「見てみて」と嬉しそうに想いを共有しようとする姿がみられていた。職員が、子どもたちの仕草や表情を代弁しながら声にすることにより、子どもたちが音をマネて、言葉につながった。体験を通して言葉に変換することにより、意味と言葉が一致して、さらに応用として自分でも使って見るという行動が見られた。子どもたちが無言の中に込められた想いを保育者がいろいろな角度から考え、想いを「こうかもしれない」「こうしたかったのかな?」と想像することにより、子どもたちの思いがカタチになっていった。今回の活動で、子どもたちの想いを汲み取るための余韻や、じっくり遊ぶ環境の大切さを実感した。今後も、子どもたちが様々な自然や素材を使って、出会いによる体験から五感を刺激し、表現豊かにその子なりに想いを伝えられるよう育てていきたい。

### 1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】  
身体を動かして子どもたちの想いやアイデアを表現に変えていく。音楽を通してコミュニケーションや思いやりの気持ちを育む。

【問いを考える】  
響きやリズムを「聴く・言う・まねる」などの様子から、子どもたちが「なんだと思う?」「おもしろい!」「やってみよう!」と感じながら子どもたちと保育者・講師の作り上げる空想の世界に触れるようにした。

### 2. 活動スケジュール

2025年4月～2026年3月

### 3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】  
ピアノ、楽器(タンバリン、鈴、カスタネット、オーシャンドラム、マラカス)、オーガンジーの布、大きな冷感マット、季節ごとの人形、絵本

【探究活動の内容】  
リトミック活動を通して、自分たちの身体の部位を知ったり、動きをまねて、同じ動きをしてあそんでみる。リズムや歌声や楽器やピアノの音色を聴いて興味を示し、一緒に歌ったり、講師と子どもたちと保育者が対話を通してごっこ遊び(子どもたちの世界観)を楽しむ。歌から発語につながり、言葉をまねてみる。自分たちも「やってみよう」という気持ちを育み、大人だけでなく子どもたちとのコミュニケーションをとりながらあそぶ。

### 4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

日ごろからリトミックを通してからだを動かして遊んでいたが、保育者が子どもたちの興味をより探究し、理解を深めるために講師の先生にお願いをして「ことば」「と「からだ」を育み、保育者や講師や子どもたちのかかわりの中で表現を楽しむことになる。楽器では、使い方や持ち方等を知ることができ、自分で手に取って鳴らしてみたり、リズムに合わせて音を出そうとする姿も見られた。また、音が「こんな音がするんだな」という表情をしたり、考えこみ、繰り返し音を出す様子も見られた。音を「ことば」にして繰り返し、保育者や講師に伝える積極的な姿があった。布を使って感触を確かめたり、大きな冷感マットはたちまち海に変化をし、子どもたちは「あつあつそこに魚がいたよ」と部屋の隅を指して保育者に伝えたり、友だちと一緒に「すーいすーい」と泳ぐ仕草をする子もいた。子どもたちはイメージした様子を共有し、共有した世界観で遊びこむ姿が見られた。目に見えないものが子どもたちには、見えていた。それぞれイメージしたものが頭の中で描かれており、その世界であそべるのだということがわかった。その他にも順番を守るや、ふれあいあそびを通して、「友だちと一緒に」「先生と一緒に」を経験したり、物を友だちに「どうぞ」と譲る等の姿も見られた。リトミック活動を通して、生活とつながっていること。自分だけではない世界が広がり、コミュニケーションをとる楽しさが育まれていった。活動の始まりと終わりで講師との打ち合わせ・フィードバックがあるが、その後に保育者との話し合いがあり、様子のヒアリングと次回への改善点等を話し合ったことが園長を通して講師に伝えられる。反省点は主に、子どもの発達の現状と動きがあっているか?子どもたちの導線が環境として確保できているのか?等の意見が交わされ、最善の策を毎回反映していた。日ごろの保育でもリトミック活動を保育者がする際に、今までは音楽を流してダンスをするだけだったが、表現あそび・ごっこ遊びが設定が細かく、イメージ豊かな中で楽しそうにあそぶようになった。



### 5. 振り返り

今回の活動では、子どもたちの表現や可能性の素晴らしさを保育者や講師が感じる活動となる。打ち合わせや話し合いやフィードバックでも、子どもたちの予想させる動きをすり合わせていたが、予測していたより言葉や表情で子どもたちがイメージしたものを考えたことを伝えてくれており、大きく展開した場面もあった。講師の先生と保育者が、子どもたちとの対話を重視し、子どもたちの発言や表情や仕草を言葉や動きを受け取り、共有・周知してくれて、子どもたちの「もう一回」「やるよ」と言ったやりたい気持ちにつながっていた。また子どもの姿を大人がじっくり観察したり「こうしたいのかな?」「やってみよう!」と問いを寄せて考えることで、子どもたちが伸びのびと表現をし、身体を動かす大切さを保育者は実感した。さらに、楽器の正しい使い方から片付けするときの所作の丁寧さまで、リトミック講師に子どもを通して保育者も学ばせてもらうきっかけとなった。また、リトミック活動を通して、日ごろの保育の中でも変化が見られ、ごっこ遊び等が子どもたちの設定が細かく具体的にイメージできていたり、保育者も楽しんで子どもたちのイメージを共有しながら遊ぶようになる。子どもたちが思っているより頭の中でイメージして、イメージをさらに他者と共有できることがわかったので、今後も、子どもたちが、自身の身体や音楽に興味関心を育み、周りの大人が見守ったり、対話を通して同じ気持ちで真剣にあそぶことによって、より豊かな経験となり、学びの活動へと広がるよう、心と身体を育てていく。

### 1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】

言葉を積極的に発して身体を動かしながら歌ったり踊ったりしながらその様子を伝える。対話をしながら異文化に親しむ。

【問いを考える】

「ここなんだ?」「これは?」「英語でなんていうんだろ?」「どこが違うかな?」「どうしてそう思うのかな?」

### 2. 活動スケジュール

2025年4月~2026年3月

### 3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】

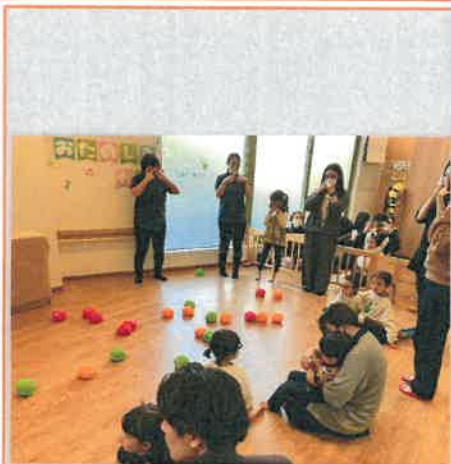
プロジェクター、スクリーン、ウィズブックEnglishon-line講師、音楽、デッキ、iPad、鏡、福笑い、テーブル、moffn、講師、

【探究活動の内容】

on-lineで英語の講師や職員と一緒にやり取りや絵本の内容に合わせたジェスチャーや英語・異文化を楽しみながら自分たちとは違う国の言葉に親しむ。対話をしながら、言葉や動物の鳴き声の違いに気づき興味を深め、新たな興味を引き出す。子どもたちが発した言葉や感じたことや表現を記録していく。保護者様と一緒に体感をする。日常でも親しめるよう英語の本を置いたり、興味をもった身体部位を使って、お正月あそびで福笑いを取り入れる。毎日重ねることに「違う国」を身近に感じる。

### 4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

on-lineでセブ島に住んでいる講師と、職員と一緒に絵本の内容に合わせてジェスチャーや言葉を楽しみながら自分たちとは違う言葉、色使い、鳴き声等を親しむ機会を作っている。リアルタイムで講師とつながっているの、事前に興味のあること・聞きたいことを活動の始まる前に講師との打ち合わせをしておく。現地の日本人スタッフが日本の文化や状況も詳しく講師に打ち合わせしてくれて、子どもたちとのやり取りが、子どもたちの興味の引き出す内容となるよう準備をしてくれている。子どもたちの笑顔や、伝えたいことが伝わったり、文化の違いを感じて驚いたり面白がっている様子を、講師たちはビデオ等を使って記録し、次に会える時に反省等をして活かしてくれている。私たち保育者もその内容を把握したり、子どもたちの伝え方が、on-lineということでもわかりづらくならないよう、必要な際に実物や媒体となるものを準備する時も、会議の内容によってはある。中でも、身体部位を使った歌が好きで、意味や言葉を実感的に理解している。その姿から、保育者が日ごろの保育にもどうやったら、子どもたちの言葉や興味を引き出せるかを考え、お正月あそびに「福笑い」を手作りし、遊ぶ際に日本語や英語を使って言葉を発したり、顔の部位を確認しながら遊んでくれるのではないかと会議で話し合い、実際に作って正月にあそんだ。子どもたちは、予想通り、日本語でも英語でも話しながら、福笑いのあそびに夢中になり繰り返しあそぶ姿が見られた。予定では1日の正月あそびを1週間、お正月あそび週間として、延長し、繰り返し遊べる環境を整えた。ブログ等で発信したが、保護者も交えてあそべたら、異文化交流、Englishの楽しさが伝わるかもしれないと会議で話し合い、結果、2歳児が「お楽しみ会」にて、保護者と一緒にmoffnをつかって、ダンシング玉入れをした。ダンスタイムが普段のEnglishで気に入って歌っている「Head, shoulders, knees and toes, knees and toes♪」の曲に合わせて身体部位を触りながら、楽しむことにした。保護者様も英語を聞いてその場で踊って楽しんで下さり、子どもたちがこのように異文化に親しんでいるのだということを感じていただいた。



### 5. 振り返り

今回の活動では、子どもたちの身の回りには実は多くの英語があふれており、日常生活の中に自然と受け入れ、言葉に発していることが多かったという保育者と発見と驚きに気づくことができた。On-lineの講師が丁寧に子どもたちに関わって下さり、互いに英語を介して反映した言葉や異文化の生活を感じるところから、興味につながり、観察・推測・実際の体験へとつながっていった。互いの違いを自然と受け入れることによって、より興味が広がり、実際に保護者にも体験してもらえる機会を作ったことによって、相互理解が深まっていった。英語を発するうえで対話するうえで「正しい・間違い」ではなく、感じたことを互いに受け入れる体験を「ねらいのかくれたねらい」として、保育者は考えており、子どもたちに関わっていた。今後も、相手の感じ方を尊重し、柔軟に考えるということを育て、相互理解を深められるように活動を取り組んでいきたい。同時に、今年は体に着目したが、子どもたちの気づきから、動物の鳴き声や乗り物の色等いろいろな異文化への気づきをもとに、対話する大切さを育てていきたい。

### 1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】  
モフンを介して体を動かす楽しさを知ろう  
【問いを考える】  
モフンってなんだろう？モフンってどうやってあそぶと楽しいかな？

### 2. 活動スケジュール

2025年9月～2026年2月

### 3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】  
moffn=モフン(包帯を使ったボール)、ボールプールの入れ物、自分たちで作ったモフンを入れる箱  
【探究活動の内容】  
モフンを通して、どんなあそびができるかを体感し、楽しみ、自身だけでなく他者と一緒にあそぶ(体を動かす)、あそびとして、玉入れをして保育者・保護者と一緒にあそぶ

### 4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

ボールあそびを公園ですること、子どもたちが「もっとやりたい」と言っていた。ボール遊びが好きなお子たちのために、環境を変えて室内でもたくさん身体を動かして、ボールあそびができたらいいなと考える保育者の提案から、「モフン」という包帯をリユースして作ったボールを見つける。購入をして、子どもたちにあそばせると、たくさん掴んで「もっと持てるかな?」「モフンだとたくさん持てることできるんだよ」と見せてくれたり、「ふわふわしてる」「やわらかい」と感触を味わったり。親がお迎えに来る再現ごっことして、モフンをインターフォンに見立て「ピンポン」「はい」とやりとりするごっこ遊びの姿も見られた。「ねんね」とモフンを頭(おそらく枕)やお腹(おそらく布団)に置き、午睡を再現した遊びも見られたため、次に遊ぶ際にボールプールのプールを準備して遊んだ。保育者が会議で展開していく予想をたてたり、戸外活動でどんな遊びに夢中か?日ごろの楽しみと結びつけてもいいのでは?という意見が交わされた。子どもたち対保育者でダンシング玉入れを遊んでみると、音楽は子どもたちが日ごろEnglishの時間に踊っている「♪Head Shoulders knees&Toes」の曲が親しみがあるようだった。子どもたちが「もっとやりたい」「せんせいたちには負けないよ」と楽しんで繰り返し遊んでいたため、保護者と一緒にお楽しみ会であそんだらもっとあそびが広がるかもしれないと思い、行った。保護者は大人なので、ダンス終了後に、座って玉入れとなったが、大人も子どもも楽しそうな声をあげて、あそび込んでいた。



### 5. 振り返り

今回の活動では、日ごろから戸外であそんでいたボールあそびが、室内でもできるように、身体を使ってモフンの遊び方を推測・実際の体験へとつなげて半年かけてあそび込んだ。子どもたちはモフンとの出会い～あそびの可能性を自身で見出し、本来のボールならたくさん持つことのできないと予測させる「たくさん持ち」を柔らかい感触のモフンによって実現をさせる。見立てあそびも始まり、生活に密接しているおり、迎えの際の保育者と保護者のインターフォンのやり取りあそび。柔らかい感触から、午睡時の枕や布団に見立てて遊んでいた。職員たちが意見の交わし中の気づきから、環境を変えてあそびを展開してみようということになり、ボールプールから、広いスペースを使って室内であそんでみる。子どもたちの中で、自分たちで作ったモフンの片付け入れ物に、出し入れする様子が見られたので、玉入れ遊びに発展をしていった。動きが活発になり、ダンシング玉入れを保育者対子どもたちであそんだところ、子どもたちが「もう1回やろう」「先生たちに負けないからね」「楽しい」と汗ばみながらも楽しむ様子が見られた。保護者と一緒にあそぶ行事の「お楽しみ会」が開催予定だったので内容をモフンを使って大人対子どもたちのダンシング玉入れを玉入れとする。子どもたちは普段楽しんであそんでいることが、保護者と出来て、張りきって活動に参加をしていた。遊びや活動の中で自然と身身体を動かしたり、モフンでの遊び方について、大人が考えるよりも遥かに子どもたちから、可能性を引き出せていた。少し、高度な遊びとなりそうだが、「色」がモフンについており、「色」ごとに集めたり、「色」によって玉入れの箱を変えても、子どもたちは楽しんで遊べるかもしれないという保育者の見立ても話し合いの中で展開していった。モフンによって保育者と子どもが「楽しい時間」を共有したり、あそびを推測して体感する様子から「考える」学びのサイクルが生まれることを、今回の活動で実感した。また保育者が、子どもの育ちを捉えられるきっかけともなった。今後も、子どもたちが自身の身体を楽しみながら探究しながらあそぶことへの活動を取り入れていきたい。同時に、保育者や周りの人と一緒にあそぶ体験を通して、他者との協力を大切にできるような心を育てていきたい。